ボブ・ディランのように

月野みさと

のばしても手が届かない
指先の爪がひっかかっただけで
地面にひきもどされた。

あやつり糸が切れたマリオネットみたいに。

爪の先をかきだすと　わずかな蒼が
思いがけず光を放つ。

それは確かに輝くコバルト色で
てのひらで不思議にまたたいて消えない。

ロックを聞きはじめた17才の夏。
愛なんて知らず愛されていて
恋なんて知らず恋していた。
フォークソングは毒のように痛く
怒りの声に守られてやりすごす日々。
ふかんにクラスメイトを軽べつした。

わたしには世界中でなにがほしいか
もうわかっている。
今さら恋なんておかしい。
勉強なんてバカみたい。

地面がたよりない幻想で満ち、
足元がふわふわした。

はたちの美しさはもろく
散りゆく花びらのごとく過ぎ。
気づくとわたしは
墓標の前に立っていた。

刻まれた名前には記憶がない。
それなのにここに何度もひきもどされる。
なぜなのだろう。
さかんに散る花びらと春の陽ざし。
目眩いがする。

てのひらに残るコバルト色が
かすかな正気を呼びさます。

ほんの少しだけ違う路はないものか。
身体(からだ)の向きをちょっと変えるだけでいい。
すぐ横の路地を行けばいい。
ふらふらと散歩がてら歩き、
のらりくらり離れていけないものか。

師と仰ぐフォークシンガー
ウッディ・ガスリーを見舞い続け
こころを分かつことを恐れなかった
ボブ・ディラン
彼がウッディ・ガスリーのために

唄を作り、あるきはじめたように。
ころがる石のように
自らの足であるきはじめたように。

のばした手の指先が届かない
空の蒼を爪でひっかいて
また地面にひきもどされた。
まるで　あやつり糸が切れた
マリオネットみたいに。
埃にまみれた墓標をそっとぬぐうと
忘れ果てた懐かしい名前がそこに
ようやく現われた。

花びらが散る　花びらが散る
散り落ちたあとの蒼穹に
濁りのないわたしが
ただ独り　のこる。

花びらをすりへった胸に
かき抱く。
それはわたしの、
ひびわれ剥がれ落ちた、
感情の内壁のようだった。

17才の春。
フォークソングは優しく私を包んでいた。
愛なんて知らず愛された。
恋なんて知らず恋した。